2022年7月17日･佐土原キリスト教会･礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書9章14～29節
説教題：信仰を回復するために

カナダの教会に神学校の「クリスチャン･カウンセリング･コース」で学んだ兄弟が、時々参加してくれていました。彼が話してくれた話ですが、神学校での実習は「実際に彼がクライアント(患者)を相手にカウンセリングをしている様子がビデオに撮られ、後からそれを教授と一緒に見ながら指導を受ける」という形式だったそうです。失敗や上手く行かずに焦っている様子が、そのまま目に飛び込んで来るのでしょう。「あれは地獄だった」と、彼は言っていました。「自分の姿を第3者の立場から見せられて愕然とした」と言っても良いかも知れない。しかし、彼のカウンセラーとしての成長のためには､それが必要だったのです｡それは､信仰についても言えるかも知れません。星野富弘さんが次のような詩を作っています。「自分の顔がいつも見えていたら、悪いことなんかできないだろう。自分の背中がいつも見えていたら、侘しくて涙が出てしまうだろう。あなたは私の顔をいつも見ている。私の背中をいつも見ている」(星野富弘)。「自分を第 3 者の立場から見つめる目」、それを信仰的に言い換えるなら「『神様の目に自分はどのように映っているのか』それを思う視点」と言うことが出来ると思います。その視点を持つことも必要だと思います。それが私達の信仰生活を助けるのではないでしょうか。

前回、「ヘルモン山の上でイエス様のお姿が変わった」という「変貌山」の記事から学びました。「変貌山」は、ペテロ達の信仰を励ます素晴らしい瞬間でした。しかし、山から下りて来た彼らを待っていたのは何だったのでしょうか。19 節でイエス様が「いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょう」(19)と嘆いておられます。何を嘆いておられるのか。「ああ、不信仰な世だ」(19)。不信仰を嘆いておられるのです。1人の父親が幼い時から「口をきけなくする悪霊」に憑かれて苦しんでいる息子をイエス様の所に連れて来ました。｛「マタイ福音書」の並行個所には「てんかんで、たいへん苦しんでおります」(マタイ 17:15)とあります。「てんかん」のような症状としてあらわれたのでしょう｝。しかしイエス様は留守です。そこで麓に残っていた弟子達が「では私達が…」ということで癒そうとしました。しかし、彼らには癒すことが出来ませんでした。弟子達がうろたえているところに、律法学者が付け込んで来て、議論になったようです。「お前達はインチキじゃないか」、そう言われたかも知れません。そこにイエス様達が山から帰って来られ、結果としてイエス様がその子供の病気を癒される―(悪霊を追い出してしまわれる)―のです。

「苦しむ親子を前にして、誰も何も出来ずに、弟子と律法学者が議論している、その回りで群衆が騒いでいる」、その様子にイエスは「不信仰な世」を感じられたのだと思います。しかし、この個所の最後で弟子達がイエス様に尋ねます。「どうしてでしょう。私たちには…(悪霊を)…追い出せなかったのですが」(28)。それに対してイエス様は「この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません」(29)と答えられます。この個所で深刻なのは、不信仰が「世の中(世間)にだけ」あったのではないということです。弟子達の中にも、不信仰があったのです。そして、その不信仰が彼らの「祈り」に現れたのです。「祈り」は、最も宗教的な行為です。だからこそ、「祈り」に彼らの不信仰が現れた。では、彼らは祈らなかったのか。もちろん祈ったはずです。では、なぜ「祈りによらなければ…」と言われるのか。彼らの何が不信仰なのか。

今日、この個所から「信仰を回復するために」というタイトルで3つのことを申し上げます。

1：信仰の回復のために神の目で自分を見る

彼らの「祈り」の何が問題だったのか。2つのことが考えられます。1つは、「祈りは、積み上げなければならない」ということです。もちろんその場で祈ることも大切です。随分前ですが、「百万人の福音」にある先生が次のように書いておられました。「私は、人と会う前に1分間その人の状況を思いつつ祝福を祈ります。わずか1分、されど1分です。『自分を大切にするように相手を

大切にする』ための１分間が互いを養い育てる関係を作ります」。そのようにその場で祈ることも大切です。でも一方で、祈りは「まじないの言葉」ではありません。「祈ればパッと不思議なことが起こる」というものではありません。「普段の祈りの積み上げ」、また「その祈りによって養われる神との関係」、そういうものが大切なのではないでしょうか。その意味でイエス様は「あなた方の祈りは『祈りの生活』に支えられたものではない」と言われていると、受け取ることが出来ます。

そのことに関連しますが、もう１つは―(そしてこちらが中心になりますが)―「祈りによらなければ…」という言葉を字義通りに受け止めれば、「あなた方は祈らなかった」というか、「あなた方の祈りは祈りではなかった」と言われたということです。「祈りが祈りになっていない」とはどういうことでしょうか。何が弟子達の祈りを妨げているのでしょうか。イエス様は弟子達にどのような不信仰を見ておられたのでしょうか。「マタイ」の並行個所では「あ、不信仰な、曲がった今の世だ…」(17)と嘆いておられます。「曲がった」というのは「神との関係が曲がっている」という意味でもあります。どういうことでしょうか。

私には、こんな経験があります。ある有名な伝道者がバンクーバーに来られるということで、「先生の教会でもその方を招いて伝道集会をしてはどうか」とお誘いを受けました。教会で話し合って、その先生をお迎えして、伝道集会を開くことにしました。私は挨拶も兼ねて、その先生を空港にお迎えに行きました。ところが空港に行く車の中で―(何が原因だったのか)―家内と喧嘩になりました。空港では、そんなことはなかったかのように精一杯繕ってその先生をお迎えしました。その先生が「コーヒーが好きです。僕は蜂蜜を入れます」と言われたので、家内に「買って来て!」と言いました。彼女は、子供を抱えてスターバックスに買いに行きました。ところが蜂蜜はもらって来たけど、蜂蜜をかき回すマドラーをもらって来ていないのです。私は、家内に「マドラーをもらって来て!」と言いました。彼女は可哀そうに、また子供を抱えてもらいに行きました。その様子をじっと見ておられた先生が「だいたい君のことは分った」と言われました。「お前はなっとらん。もっと奥さんに優しくしなさい」ということです。私は、その言葉にドキッとした―(正確にはカチンと来た)。「初めて会って、10 分やそこらで『君のことは分かった』等と言わないで欲しい」という思いがあったのです。その先生を宿泊先にお送りして、また夫婦喧嘩をしながら帰りました。夜になって、次の日の伝道集会をどのように進めようかと考えました。その時に「ニコニコしながら集会を進めている自分の姿」が見えました。「あぁ、ニコニコしながら集会を進行するのかな」と思ったら、非常に偽善的に―(また虚しく)―思えました。「そんな思いで参加はしたくない」と思いました。ところが次の朝、私は、先生のあの嬉しくない言葉によって、何か自分が整えられ、癒されているのを感じたのです。不思議な感覚でした。それもあって私は、伝道集会の場で、前日のことをほぼ正直に話しました。参加された方々がどう聞かれたか分りません。しかし、私自身はその集会を心から楽しむことが出来たのです。

情けない経験ですが、私にはレッスンでした。有名な先生を招いて伝道集会をするということで、私の意識は、その先生の目を含めた人の目とか、体裁とか、そのようなものばかりに行っていたように思うのです。人の目、あるいは自分の目、それが全てだったように思います。でも一瞬ですが、第 3 者の立場から自分を見たのです。ある意味で「神様の目に映る自分の姿」を見たのです。その時に、自分の偽善が見えた、大切にするべきものは何なのか、それが見えた気がしました。この時の弟子達は、「神の目に映る自分達の姿」を見ることが出来ていたのでしょうか。彼らの祈りの中で、神様こそが本当に大きな位置を占めていたのでしょうか。私と同じように、その視点がなかったのではないでしょうか。だから彼らの信仰生活が、そして祈りが、神の前に整えられていなかった、その祈りには、神ご自身に向かって行くような霊的な姿勢が無かったのではないでしょうか。それをイエス様は「神との関係が曲がっている」、「不信仰だ」と言われたのではないでしょうか。私達も、人の目ばかりが大きくなってしまうことがあるのではないでしょうか。だからこそ私達は、「神の目に映る自分」というものを意識する必要があるのではないかと思います。その時に「いつ

まであなたがたにがまんしていなければならないのでしょう」(19)というイエス様の声を聞くことが出来るのです。そこから、信仰生活の回復、祈りの回復が始まるのではないでしょうか。

2：信仰の成長のために主イエスの中に飛び込む

しかしこの個所は、さらに私達の信仰の姿勢を先に導きます。子供の父親はイエス様に「もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください」(22)と言いました。それに対してイエス様は「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできる…」(23)と言われます。彼の「もし、おできになるものなら」という言葉は、イエス様に対する遠慮の言葉―(謙遜の言葉)―だったかも知れません。私達にも神様に対する遠慮があります。「神の主権」に対する謙遜があります。だから、それはそれで「あって然るべき」だとも思います。しかし父親の言葉には、もう 1 つの背景があると思います。彼は、恐らく子供を連れてありとあらゆる医者を訪ね、治療を試み、まじないをしてもらい、そして何度も絶望を味わったのではないかと思います。祈りもしたでしょう。でも聞かれない。その苦い経験から出ている言葉―(悲観的な疑いを含んだ言葉)―なのかも知れません。私も、祈りに「もし出来るならば…」とか「御心ならば…」と付け加えることがあります。皆さんはいかがでしょうか。申し上げたように、それは神の主権に対する遠慮でもあります。しかし一方で、その言葉を使う時、私達の中に不信仰はないでしょうか。つまり条件をつけて、もし祈りが叶わなかった時でも、信仰が傷つかないように、誰かを傷つけないように、予め逃げ道を造って安心しているような、そんな思いはないでしょうか。もし、そういう思いを持ちながら祈るのであれば、それも「祈りが祈りになっていない」、「不信仰だ、その祈りには力がない」と、イエスは言われるのではないでしょうか。「あなたがたが信じて祈り求めるものなら…」(マタイ 21:22)と言われた言葉の重みを思うことです。

しかしそうは言っても、私達には「完全に信じ切って祈る」ということは難しいのではないでしょうか。「その信仰を持ちたいが持てない」、それが現実です。しかし、だからこそこの物語があるのです。イエス様の「いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょう」(19)は突き放した言い方ではないのです。その弱い不信仰を背負い続けようとされるからこその嘆きなのです。しかしイエスは、嘆かれるだけではない。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできる…」(23)と言われるのです。「信じる者」とは誰か。「信じる者」とは、誰よりもイエス様のことです。イエスは、父なる神の恵みを信じておられる。信じ切って祈られるから、神の力で癒せるのです。しかしイエスは、ただ「私は信じているから出来る」と言われるのではないのです。父親は言います。「信じます。不信仰な私をお助けください」(24)。彼は「信じます。だから子供を助けて下さい」とは言っていない。いや、そういう思いはもちろんあるでしょう。しかし、言葉としては「信じます。信仰のない私を助けて下さい」です。「助けて下さい」。何を助けて欲しいのか。「私の信仰」です。「メッセージ訳聖書」は「疑う私を助けて下さい」(24)と訳しています。イエス様は「信じる者にはどんなことでもできる」と言われた。しかし彼は、「もしおできになるものなら…」という信仰しか持ち合わせていない。彼は「その信仰」を「信じることが出来るような信仰に引き上げて下さい」と言っているのです。ですからイエス様の言葉は、「あなたの信仰を一旦脇に置いて、私の信仰の中に飛び込んで来なさい。その思いを持ってみなさい」という励まし、彼の信仰を助けようとされる言葉でもあるのです。

イエス様は、不信仰を嘆かれただけではく、その不信仰の人々の中に信仰を生み出そうとしておられるのです。私達も「もし、おできになるなら…」としか祈れないような者です。祈りに様々な条件をつけて安心しようとする者です。だからこそ、その信仰を育てて頂く必要があるのです。それは「信じる者には、どんなことでもできる」と言われるイエス様の信仰の中に、自分も飛び込む思いを持つことが出来るように、願い求めて行くことではないでしょうか。

三浦綾子さんについて、こんな話があります。夫の光世さんとの結婚式を半月後に控え、病弱だ

った綾子さんは高熱を出して床に臥してしまいました。医者に掛かっても、安静にしても熱が引かない。とても結婚式が出来る状態ではない。家族は「結婚式延期」の通知を出そうとします。その時、光世さんだけはただ一人、「必ず熱は下がります。この結婚を導いて下さった神を信じましょう」と言って譲らなかったのです。当日の朝になって、嘘のように熱が下がりました。三浦さんは「ヘブル書」の「確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものです」(ヘブル 10:35)の言葉を噛み締めた、と書いていました。この時、光世さんも、イエス様の信仰の中に飛び込んだのではないでしょうか。そのような信仰を、イエス様は私達にも期待されているのではないでしょうか。

3：信仰理解のために、聞かれない祈りに恵みを見る

しかし、ここで確認しなければならないのは、「『祈ったけど癒されなかったのは、祈った人の信仰が足りなかったからだ』というような考え方をしてはいけない」ということです。

ある先生が「神は、3つの方法で祈りに答えて下さる」と言われるのです。「1つは、すぐに祈りが聞かれるという方法、2つ目は、時間をおいて聞かれるという方法、3つ目は、祈りが聞かれないという方法で答えて下さる…しかし『聞かれない』ということの中にも必ず神様の愛と理由がある」と言われるのです。その例としてご自分の奥様の話をされました。奥様は、最近、倒れられたそうです。お体がご不自由です。その先生も「私は何か悪いことをしのだろうか、何か間違っていたのだろうか」と思われたそうです。しかし、少し落ち着て来て、考えが変わって来たそうです。夫婦して奉仕のために世界中を飛び回っていた。奉仕(仕事)にのめり込んでいた。止めようにも、止めることが出来なかった。特に奥様は、世のため、人のため、自分を忘れて奉仕された方だそうです。「あのまま行ったら、私達は命を縮めていたのではないか。神様は、こういう形で私達に立ち止まることを与えて下さったのではないか。私達は愛されているのだ」。そういう話でした。「不幸に見えることの中に必ず感謝がある」ということです。私達は、祈りについて、信仰について、そのようなことも、理解しておきたいと思いました。

4：最後に

まとめます。私達は時に不信仰です。でもイエス様は、私達の不信仰を背負い続けて下さいます。だからこそ、「いつまであなた方にがまんしていなければならないのでしょう」というイエス様の呻きを聞き続けたいと思います。そして「神の目に映る自分の姿」を見る視点を持ちたいと思います。そして「イエス様の信仰に飛び込んで行くような信仰」を、「祈りの姿勢」を、持ちたいと思います。信仰を育てて頂きましょう。祈りの生活をしましょう。